

谷崎潤一郎

新訳 源氏物語 卷五

谷崎潤一郎

新・源氏物語 卷五

中央公論社



新々訳源氏物語卷五奥付

昭和四十年四月十日印刷 昭和四十年四月二十日発行

訳者谷崎潤一郎 発行者宮本信太郎 印刷者高橋武夫

発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地



定価四八〇円

卷五目次

螢	三
常夏	三七
篝火	五
野分	五七
行幸	七九
藤袴	一一
真木柱	一九
梅枝	一七一
藤裏葉	一五三

ぼろろ

螢 ほたる

イ、「乙女」で三十二歳の夏に源氏は太政大臣になつてゐる

ロ、六条院の西の対の姫君、玉鬘

今はこのように重々しい地位にいらつしやいまして、何事にもものんびりと、物静かに暮しておいでですから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それぞれ御自分たちの思い通りの境涯きやうがいに落ち着き、すっかり御身分が定さだまつて、仕合せに過しておいになります。ただ対たいの姫君は、お可哀そうにも思ひのほかかな心配事ができまして、どうしてよいやらと案じわづらつていらつしやるらしいのです。あのいつぞやの大夫たいふの監けんの厭いやらしさとは一緒にすべくもありませんけれども、そんな風なお心がおありになるとは誰も夢にも存じ上げないことです。ですから、ひとりひそかに胸をお痛めになりながら、一種異様な疎うとましさを感じていらつしやるのでした。いろいろなことが分つて来られたお年頃のことなので、あれやこれやとお考え集めになつては、母君が亡くなつておしまいなされた口惜くちわしさをも、今さらのように悔くやしく悲しく思うのです。大臣おとども、お口に出してお打ち明けになり

イ、五月は縁を結ぶことを忌んだ月であるという

ロ、参議の唐名

ましてからは、かえって悩んでいらつしやいましたが、人目を憚り給うて、ちよつとしたこともよろう仰せにならず、苦しさの餘りには何かと足繁くお渡りになりまして、お前がひっそりと人気のないう折には、それと仄めかし給うことがありますので、そのつどはつとなさりながら、そうきっぱりと、間の悪い目にお遇わせ申すわけにも行かず、ただそのようなことは分らぬ風にあしらつておいでになります。御性質が晴れやかで、人なつくておいでですから、せいぜい取り澄ましたつもりで用心していらつしやいまして、やはりにこやかに、愛嬌のあるところがお見えになりますので、兵部卿宮などは切々とおたよりをお上げになります。まだ志をお見せになってからそれほどの日数を経たわけでもありませんのに、もう五月雨になつたことをお訴えなされて、「今少しお側近くへ伺わせていただけましたら、心にあることの片端なりとも申し上げて、気を晴らすのですが」とおしたためになるのですが、大臣は御覧になりまして、「何の、構うものですか。こういうお方たちの御懇望ならさぞ甲斐のあることでしょう。あまりそつてなさいますな」とお諭しになり、「時々御返事をお上げなさい」と、文句を教えて、お書かせになるのですけれども、姫君はひどくお厭なので、気分が悪いと仰せになって、書こうともなさいません。女房たちの中にも、取り分けて身分のいい、里方の有力な者などはあまりいません。ただ母君のおん叔父で、宰相ぐらいの人の娘で、才能なども一通りは備わっていますのが、親に後れて落ちぶれていましたのをお取り立てに

へ、妻戸は廂ふすまの四方の隅すみにあり、戸は両開きになっている。「妻戸の間」は、妻戸をあけた戸口のところになる廂をいう

なりまして、宰相の君と呼んでいらつしやいましたが、それが手なども相應に書き、いつたに世馴れていきますところから、しかるべき折々の御返事などをお言いつけになることがありますので、その者をお召し出しになりますして、言葉などを授けてお書かせになります。

殿にしてみれば、宮がどんな風に言い寄られるか、様子を御覧になりたいのでしよう。当の姫君もまた、あの浅ましい思いをなさってから後は、この宮などが志深げに言ってお寄越しになりますと、少しは眼をとめてお読みになる折もありました。それというのも、どうのこうのと思うのではなくて、歎かわしい大臣のなされ方を、見ぬようにする術すべもがなと願うところから、さすがに洒落しやれた考えにおなりなされたのでした。宮は、大臣が妙に御自分ひとり力瘤ちからこぶを入れて待ち構えていらつしやるのも御存じなく、色よい御返事があつた嬉うれしさに、たいそう忍びやかにしてお渡りになりました。と、妻戸の間におん茵しとわを設けて請じ入れるのですが、御几帳みきようだけを中に隔てて、つい姫君のお側に近い所なのです。非常に心を配つて、空薫そらだきものを奥床しいように匂におわして、何やかやと世話をお焼きなさいますが、親でもおありにならないお方の餘計なおせっかいながら、さすがに優しくお見えになります。宰相の君なども姫君のおん答こたえをお取り次ぎしようともせず、羞はづかしそうにもじもじしていますのを、「しつかりおし」とお抓つかりになりますので、いよいよ当人は弱り込んでいます。夕闇ゆふぐみの時刻が過ぎて、空がどんよりとおぼつかなさそうに曇っています折から、しめや

かにしておいでになる宮のおん有様も、なかなか艶えんなのです。御簾みすの内からほのかに匂におつて来る風の中にも、そうつと隠れておいでになる大臣の御衣おんぞの香かが添そっていますので、たいそう深い薫かおりが満ちて、かねて考えていらしたよりもみやびやかなおんけはいに、宮は心をおとめになるのです。お胸の中のこともを、今こそ打ち出でて仰せつづけられるお言葉の大人おとなしさは、一途いちずにすぎずきしゅうはなくて、また格別なところがあります。大臣も感心なさりながら漏れ聞いておいでになります。

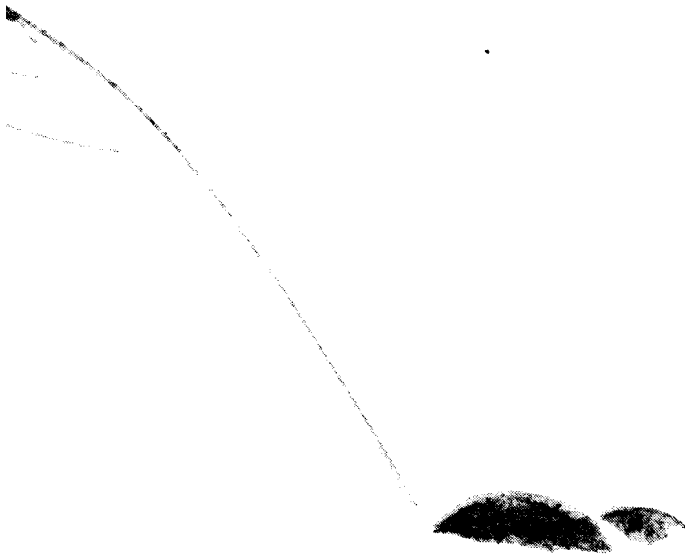
姫君は東面ひがしおもてのお部屋に引き籠こもつて、寝やすんでおしまになりましたが、大臣は宰相の君が、おん消息を取り次ぎにお側近くいざり入ったのに尾ついていらして、「あまり窮屈きうくつなおあつかいではありませんか。何事もほどほどになさるのがいいのです。そう一途に子供こどもっぽくしていらっしゃるお年頃でもありません。この宮などへは、遠くの方から取次ぎを入れてお話しになる、というようにことをすべきではありません。たとえお声はお聞かせにならないにしても、せめてもう少し近くへお出になつて」などとお諭さとしになりますので、なおさら当惑たうかくしておいでになりますと、やがてそれにかこつけて、御自分がいってもいらっしゃりかねない御様子なので、どちらにしても面倒とすべり出て、母屋おもやの際きわの御几帳かたわの傍かたわらに、横におなりになりました。宮はさまざまにながながと仰せられるのですけれども、おん答こたえもなさらないで、ためらつていらっしゃいますと、そこへ大臣

イ、几帳の帷は表裏二重になつてゐるので、多分裏の方を一重揚げたのであらう。表の帷はやはりそのまま垂れてゐるので、光が透いて見えるのである

が寄つていらして、御几帳の帷を二重お揚げになるのと一緒に、何か光るものを、ぱつとお差し出しになりましたので、紙燭かしらん、とびつくりなさいます。この夕方に、螢をたくさん几帳の薄い帷に包んで、外へ光が漏れぬように隠しておおきになりましたのを、何げなく帷を繕う風をしてお放しになつたのでした。にわかにあたりが際立つて光つたので、呆れて、扇をかざしてお隠しになつた横顔が、何とも美しいのです。大臣は、こういうようにして夥しい明りがさしたら、宮もお覗きになるであらう、この姫君を全くこちらの娘であると思ひ込んでいらつしやればこそ、こんなにも仰せられるのであらうが、人柄やみめかたちなどがこつとも備わつていようとは、まさか御存じないであらうに、實際のところをお見せ申して、たいそうな好色漢でいらつしやる宮を迷わして上げたいものと、そういう御計画でお工みになつたのでした。もし本当に御自分の姫君でいらつしやつたら、かような騒ぎはなさらないでありますように、さりとて疎ましいお心なのでした。

ロ、柱と柱との間隔のこと、「一室」の意ではない

大臣はそうつと別の口から抜け出して、お帰りになりました。宮は姫君のいらつしやるのを、おおよそあのあたりと推測しておいでになりましたのに、それより少し近いところではいがありますので、お胸をときめかせられながら、一通りならぬ結構な羅の、几帳の帷の隙間からお覗きになりますと、一間ばかり隔たつた眼の前に、そんな具合に思わぬ光がほのめいていますのを、面白く



お感じになります。と、やがて誰かがどこかへ隠してしまいました。でもそのほのかな光こそは、この艶つぼい出来事の色どりのようにも見做せます。つい今しがた、ぼんやりとではありますけれども、すらりとした背恰好のお方が臥せっていらつしやったお姿の、ちらと美しく見えたのが、いつまでもお忘れになれず、案の定おん心に染みついたのです。

「なく声もきこえぬ虫の思ひだに

人の消つには消ゆるものかは

お分りになつて下さいましたか」と仰せになります。女君はこのようなおん返しに、かれこれ手間をかけるのも変なものですから、ただ即座というのだけを取柄に、

声はせて身をのみこがす螢こそ

いふよりまさる思ひなるらめ

ある
「、声には出さないで
終夜ただ身を焦して
いる螢の方が、口に
出しておっしゃるお
方よりも一層切ない
思いを抱いているで
ございましょう

などと、あつさりと、宰相の君から伝えさせて、おんみずからは引つ込んでおしまになりましたので、ひどく餘所々々しくお扱いになる情なさを、この上もなくお恨みになります。でもすすぎしいようなので、明け果てるまではいらつしやらないで、折からの五月雨に軒の雫のしたたるのを聞くのも苦しくて、濡れながら夜深くお出ましになるのです。時鳥なども必ず啼いたことでしょう。そういう細かいことまでは、うるさいので聞き漏らしたけれども。

へ、五月には近衛官人の騎射競技がある。三日四日には近衛府馬場で荒手結を、五日六日には内裏馬場で真手結を行う。五日は左近衛府の真手結の日であるが、ここでは六条院に設けられた馬場でおこなっている

宮の御様子のなまめかしいところなどは、大臣の君にたいそうよく似ておいでになると、女房たちはお褒め申し上げるのです。昨夜は大臣が女親のようにかいかいしくお世話なさいましたのを、内々の事情も知らないで、人々はひどくもったいないように言います。姫君はまた、うわべは親身らしくお尽くしになって下さるのを見るにつけても、自分の運が悪いのだ、父上にお会い申すことができ、普通の娘の身の上になって、こういうお情を蒙るものならば、似つかわしくもあらうけれども、今のような不思議な境涯にいて、しまいには世の語り草になるのであらうかと、起き伏し案じわづらつていらつしやいます。しかし大臣も、本当にそう身も蓋もないような風にはしてしままいと、思つていらつしやるのです。ただ例のお癖のある御性分ですから、中宮などにも、心からおきれいなお氣持を抱いていらつしやるのではないのです。何かの折にはお氣を引くようなことをおつしやつたりなさいますけれども、及びもつかないやんごとなき御身分なのが面倒で、立ち入つてお打ち明けにはならないのですが、この姫君は人なつこく、当世風でいらつしやいますので、ふつと妙な氣をお起しになりました、おりおり人に見つけられたら訝しまれそうなおん振舞いも交るのですけれども、辛うじて休えていらつしやるという、むずかしいおん間柄なのでした。

五日には馬場の御殿にお出かけになつたついでにお立ち寄りになりました。「どうでしたかね。宮はあの晩おそくまでいらつしやいましたかね。これからはあまり近くへはお入れ申さないことに

い、五月五日の縁語で「あやめ」という言葉を用いたのである。五月五日は菖蒲を引く日であるのに、その今日でさえ、自分は寂しい水の中に隠れて引く人もなく生えてゐる菖蒲のよう、根のみ流れる（音のみ泣かれる）のでしょいか。「みがくれ」は「水隠れ」で水の中の隠れた所へ、菖蒲の根を、どうせそう深いとは思つてもおりませんでしたが、泥水の中にいた間は何とも分らずにいた菖蒲も根を引き出して洗つてみると、ひとしお浅いことがよく分りました。「洗はれ」に「隠はれ」、「菖蒲」

しましょう。厄介な癖がおりになるお方なのです。人の氣持を損ねたり、何かの間違ひをしでかしたりしない人というものは、めつたにいないのですね」などと、昨日は褒め、今日は貶し、活かしたり殺したりしてお諭しになります御様子、言ひようもなく若々しく、美しくお見えになります。艶も色もこぼれるばかりな御衣に、おん直衣が無造作に重なり合っている取合せが、どこの加減なのでしょう、この世の人が染め出したとは思えないほどなので、いつもと同じ色の衣裳の文目も、今日は珍しく、薫りの高いお袖の匂いなども、あの厭らしいことさえなかったら、面白くお眺め申しもしようものと、姫君はお思いになります。と、ちようど宮からおん文があります。白い薄様に、お手はたいそうよしありげに書いておありになります。でも、見ては興のあります歌も、あとで筆にしてみますと格別のこともありません。

けふさへや引く人もなきみがくれに

生ふる菖蒲のねのみなかれん

後々の例にも引き出されそうな長い根に、結びつけておありになりますので、大臣も「この御返事」などとおすすめになつておいて、お出ましになります。お側の誰彼なども、「やはりなさいました方が」と申し上げますので、御自身も何とお思いになつたのでしょいか、

「あらはれていとど浅くも見ゆるかな

に「文目」へ、「流れ」に「泣かれ」へ、「根」に「音」をかけ、「無分別に声を出して泣いてばかりいらつしたあなたのお心の浅さがひとしおよく分りました」の意

＊、花散里

へ、夕霧
と、一頁頭注へ参照

菖蒲もわかずなかれけるねの

若々しゅういらつしやいますこと」とばかり、うつすらとお書きになります。今すこし風情のある筆蹟であつたらと、宮は風流なお方でいらつしやいますから、いささか物足りなくお感じになつたかも知れません。

姫君のおんもとへは、所々から薬玉などを、見事に飾ってたくさんにお贈りします。筑紫の田舎で佗び住居をなすつた長い間の御苦労などは、今は全く名残りもとどめぬおん有様で、お心持ものびのびとなさることが多いにつけ、同じことなら人に疵がつくようなことなしに、圓く収めたいものだと、どうしてお願いにならないことがあります。殿は東のおん方のお部屋をもお覗きなされて、「今日は中将が、左近の司の真手結を勤めますついでに、男どもを引き連れてこちらへも参るよう申しておりましたから、そのおつもりでいらして下さい。きつとまだ明るいうちにやつて来ます。どういふものかこの邸で催し事がありますと、内々で済まそうと思ひましても、じきにこの親王たちが聞きつけて、訪ねておいでなさいますので、自然大袈裟になるのですが、どうか御用意をなすつて下さい」などと仰せられます。馬場の御殿はこなたの邸から見通されて、そう遠くない所にあります。「若い人々は渡殿の戸を開けて見物なさい。この頃左近衛府には風流な官人が大勢います。なまじな殿上人などに負けはしますまい」と仰せられますので、女房たちは見物